

現象学と民俗学の接点に関する一考察 —「異他性の現象学」の現状と展望—

北野 孝志

はじめに

フッサール現象学をはじめとして、現象学において「他者」がテーマとして論じられる際、常に「他者の他者性 Andersheit」という問題がその議論を困難に陥らせるものとして考えられてきた。それに対し、ヴァルデンフェルス（Bernhard Waldenfels, 1934-）は「異他性 Fremdheit」という概念を特別に扱うことの重要性を訴えている。

ヴァルデンフェルスは、ドイツ語において Fremdheit の意味で Andersheit という言い方をすることがしばしばあるということは認めている。また、fremd と同じくらい豊かな語彙を持った言葉のない西洋の他の言語では、異他性に関する問いは大抵他者の問いとして扱われている（vgl. GPF, 112）。

その意味では、日本においても同じような事情にあるように思われる。ドイツ語の Fremdheit を訳した「異他性」という言葉も日常的に使用されるものではなく、日本語でぴったりくる訳語がないため、「他者性 Andersheit」と訳し分けて使われているだけである。また、この違いに注目した研究もほとんどない。

では、「異他性 Fremdheit」という概念に注目した研究は、少なくとも日本では意味がないのであろうか。本論はそのことを確かめるための1つの試論である。

1 異他性と他者性

まず、異他性 Fremdheit と他者性 Andersheit とではどのように違うのであろうか。ヴァルデンフェルスの記述に基づいて、簡単に確認しておこう。

Andersheit（他者性）の場合には単に「他の other」ということを意味しているに過ぎず、「他者 the other」という場合にも「他の（2番目の）私」という意味で考えられていると言える。つまり、「他者」というのは「この私とは異なる別の私」ということを意味しているのである。このように、他者性は相違性 Verschiedenheit に置き換える

ことができる。例えば、「リンゴ」と「ナシ」や「机」と「ベッド」、「材木」と「コンクリート」といったものはお互いに「他なるもの *Anderes*」であり、「同 *Selbes*」と「他 *Anderes*」という関係で相互に入れ替えることが可能である。

Fremdheit (異他性) という言葉は相違性にとどまらない多義性があり、ヴァルデンフェルスは、*fremd* の意味を3つのニュアンスに分類している。1つ目は、「固有の領域の外側に、内なるもの *Inneres* とは対立した外なるもの *Äußeres* として現れるようなもの」(GPF, 111) である。英語では、*strange* (よその) や *foreign* (外国の) という言葉と類義的である。2つ目は、固有のもの *Eigenes* と対立して、「他者に属するようなもの」(TF, 20, GPF, 111) である。英語では、*alien* (外国籍の) という言葉と類義的である。3つ目は、馴染みのあるもの *Vertrautes* と対立して、「別様のものであり、異質の *fremdartige*、馴染みのない *unheimlich*、まれな *selten* もの」(GPF, 111) である。英語では、*strange* (奇妙な、馴染みのない) という言葉と類義的である。

ヴァルデンフェルスによれば、これら3つの意味は「異他なるものが固有のものに対して際立ってくる場所 *Ort*、所有 *Besitz*、あり方 *Art*」(TF, 20) に対応する。つまり、異他なるものは固有のものとの対立において考えられるようなものであり、その意味で「異他性は自己 *Selbst* (*ipse, self*) の固有領域や固有の存在を前提としており、この自己は第三者の側から区別されるような同 *Selbes* (*idem, same*) と混同されてはならない」(GPF, 21)。

このように、異他性は固有性 *Eigenheit* を前提としつつ、その固有性に対立するものであり、それらを互に入れ替えることはできない。言い換えれば、「固有のもの」というものは「他者にとって他なるもの *das Andere des Anderen*」という以上のことを意味しているし、「異他なるもの」は「固有のものとは別なもの *das Andere des Eigenen*」という以上のことを意味しているのである。

さらには、*Andersheit* (他者性) の場合、第三者の目で見られるような客観的なものとして時間空間に位置づけられ、既知のものを通して規定される。それゆえ、「異他性」を単なる「他者性」と混同した場合、「他者 *der Andere, the other*」は「もう1つの(2番目の)私」ということを意味するに過ぎない。その場合、他の自我は私の一部として全体としての私に組み入れられるか、普遍的自我の1つの事例として共通の法則の下で考えられるようになる。しかし、そのような仕方では「他者性」と混同された「異他性」は「相対的異他性 *relative Fremdheit*」に過ぎず、根本的 *radikal* な意味での異他

性ではない。

ヴァルデンフェルスは、「異他性」の根本的な規定として、フッサールの「本源的に近づきえないものの近づきうること」(Husserliana I, 144) という逆説的なあり方を挙げている。

2 民俗学における「異他性」

前述したように、「異他性 Fremdheit」という概念はドイツ語の fremd という単語が多義的であると同時に、日本語でぴったりくる訳語がないため、日本の思想に馴染まないように思われるかもしれない。しかし意外なことに、「異他性 Fremdheit」という概念で語られていることは日本の民俗学の系譜にある「異人論」の議論と親縁性が見られる。特に赤坂憲雄(1953～)は、彼の著書『異人論序説』の中で、ヴァルデンフェルス同様ジンメルやシュッツの「よそ者」論と対決しつつ、柳田国男や折口信夫、岡正雄といった民俗学研究を通して、彼自身の「異人論」をまとめあげている。また、彼はこの研究を現象学と関連させて、場合によっては「現象学」と称して取り組んでいる⁽¹⁾。

では、このような民俗学における異人論と異他性の現象学との間にどのような連関が見出されるのであろうか。以下では、「異他性」の特徴づけに関する民俗学の異人論と異他性の現象学との共通点についてまとめたい。

2.1 関係概念としての異他性

まず挙げられる共通点は、異他性が関係概念であるということである。赤坂は「<異人>とは実体概念ではなく、すぐれて関係概念である。<異人>表象=産出の場にあらわれるものは、実体としての<異人>ではなく関係としての<異人>、さらにいって<異人>としての関係である」(『異人論序説』、21) と異人という概念を特徴づけている。

一方、ヴァルデンフェルスも前述したように、「異他なるものが固有のものに対して際立ってくる場所 Ort、所有 Besitz、あり方 Art」(TF, 20) に対応すると述べており、異他なるものは固有のものとの関係、すなわち固有のものとの対立において考えられ

るようなものである。しかもその対立は、単純に異なるものとのものが互いに区分され並べられて生じるようなものではない。「固有のもの」と異他なるものとの間の対立は、単なる区分 Abgrenzung に由来するのではなく、取り囲み Eingrenzung と締め出し Ausgrenzung のプロセスに由来している」(GPF, 114)。つまり、取り囲みによって固有のものが、締め出しによって異他なるものが生成してくるのである⁽²⁾。

しかし、この取り囲みと締め出しはそれぞれ別々の出来事ではなく、まさに同時に生起する出来事である。「異他なるものは、同 das Selbe に対してではなく、自己 das Selbst やその自己に固有のもの das ihm Eigene に対立して、同時になされる取り囲みと締め出しから際立つ」(TF, 21)。

その意味で、赤坂が「スタティックな静止した関係ではなく、不断に再生・反復されてゆく運動する関係」(『異人論序説』、24) とする異人と同じような側面を持っている⁽³⁾。

2.2 境界現象としての異他性

次に、異他性は境界現象でもある。赤坂はエリアードやバシュラールを引き合いに出しつつ、「<異人>とは、共同体が外部にむけて開いた窓であり、扉である。世界の裂けめにおかれた門、である。内と外・此岸と彼岸にわたされた橋、といってもよい。媒介のための装置としての窓・扉・門・橋。そして、境界をつかさどる<聖>なる司祭=媒介者としての<異人>」(前掲書、15) と表現し、異人が単に外部で実体化されるものでなく、まさに媒介者として境界に位置づけられていると主張する。

例えば、中世の荘園や公領の境界とされた海・山・川・交通路などにおいては境界内に住む定住民である農民や支配者とは区別される非農民である「山の民」「川の民」が漂白・遍歴しており、そこには「無縁」の原理が働いていた(前掲書、43-55 参照)。また、そのような「無縁」の場である境界領域においては市ができ、里人と山人との交通の場となった。赤坂は折口信夫の市の起源説からこのような考察をしている。さらに、市は遊女・刑場・墓地としての性格を持つ化粧坂が象徴するように、「<異界>にむけて開かれた窓」でもあり、そこで活躍した商人や遊女、遊行の聖・芸能民・乞食非人が<異人>としてくくられるようになった(前掲書、68-80 参照)。

一方ヴァルデンフェルスは、異他なるものが他のもの Anderes のように客観的な時

間空間の中に直接捉えられないと主張する。客観的な空間に位置づけられない以上、その場所は我々がともに存在しうるような空間ではないであろう。「異他性の根本的形式は、固有のものの中に根づきもしなければ、共通のものの中に場所を見出すこともできない。…根本的な異他性は、我々が決していたことがなく、これからも決していないような場所から衝撃を与えてくる」(VM, 8)。つまり、我々が出会う異他なるものは「別のどこか Anderswo」から我々を刺激するものとして現れてくるのである。

その意味で、「異他なるものは特別な意味で一つの境界現象 Grenzphänomen である」(GPF, 15)ということになる。そしてこの境界とは、固有のもの全体の秩序 Gesamtordnung であれ、共通の規則に従っている基本の秩序 Grundordnung であれ、あらゆる秩序の境界(限界)であり、この秩序の外には場所を持たないような境界である⁽⁴⁾。

例えば、眠りに落ちる時とその逆に目覚める時、あるいは病気になる時とその逆に病気が治る時などは、簡単に境界線を引くことはできない。むしろ後からの確認によって、覚醒と眠り、健常と病が境界づけの痕跡を介して覚醒や健常の側から区別されるに過ぎない。このように、境界線を引くことによって境界線のこちら側とあちら側、内側と外側とが分かれるのであり、その内にある固有のものとは外にある異他なるものとが相対化されるのである。それ故、「固有のものとは異他なるものとの間には常に不鮮明な境界が存立している」(TF, 67)。

このように、異他性は他者性のように既に区別された他のものの中のみ生じるということではなく、むしろ固有のものとは異他なるものとの間に境界線を引きつつ、そこに痕跡としてしか把握できないような間の領域、境界における現象として理解される。

2.3 他者の発見と自己の誕生

また、異他性は他者の発見と自己の誕生に関係している。赤坂は「内部の成立のためには、まず外部が析出されなければならない、逆に、外部もまた内部を前提とせずには存在しえない。同様に、われらはかれらの存在によることなしにはわれらとして自己同一化しえず、かれらの創出を待つてはじめて、われらが鮮明な像をむすぶことができる」(『異人論序説』、23)と考えている⁽⁵⁾。

例えば、柳田国男の『妖怪談義』や『山の人生』から山人と市にまつわる伝承を取

り上げて以下のように考察している。市という場合は里と山、内部と外部が重なり合う両義的な空間であり、その市へと現れる山姥・山男は魔性の存在であり、その存在が里という圏域の限界を際立たせてくれている。つまり、山人と市にまつわる民譚は<歴史>のはじまりになされた他者の発見・もしくは自己の誕生の物語とされ、山人は「特権化された内部とわれらのまなざしによって染めあげられた、根源的な他者のイメージ」とされている（赤坂前掲書、81-84 参照）。

ヴァルデンフェルスもまさしく同様に、「固有のものは何かが離れる時に生成し、その離れるものが精確に我々が異他なるもの、そして異質のものとして経験するようなものを言い表している」(GPF, 20) という。その意味で、「異他性」は「固有性」を前提とする一方で、「固有性」の方も「異他性」と区別されることによって意味として生成してくるような等根源性を持っているということである。

例えば、痛みや快感の感覚 Sinn が取り上げられる。このような感覚は、自己の身体を伴ってその身体の「内に」経験されるものであるが、それにもかかわらず最低限の距離を前提としている。つまり、「痛みを感じている人は、自分自身に悩まされていると同時に何かに悩まされているのである」(VM, 56)。このように、痛みは自分自身に、すなわち自分の身体の内を感じているにもかかわらず、その痛み自身は私そのものとは違う何かとして区別されることによって、痛みとして際立ってくるということである。

また同様の事例として、話すという働き Sprechen が取り上げられている。「話すという働きも異他性によって刻印される。我々の母語でさえ、聞きながら言うこと Hörensagen から知る。子供は言語の世界に目覚めるのであり、その言語を子供はまずは原 - 外国語 Ur-Fremdsprache として聞き取る。それには自分の名前も含まれる。それを誰もが他者からまずは呼び名として授かり、それを我々は聞く。このような異他性は、物につけられた名前にも続いていく」(VM, 57)。つまり、言語を話すということは、自分の内から生じていることでありながら、たとえ母語であってさえも、その始まりは自分のものになっていない言葉（名前）を聞きながら言うことであるという訳である。

そして、ヴァルデンフェルスはこのように自己退去によって特徴づけられ、自己分割をもたらすような異他性を脱自的異他性 ekstatische Fremdheit と呼ぶ(vgl. BE, 205)。

2.4 逸脱と過剰

さらに、異他性は自己の固有性に対する逸脱と過剰を意味している⁶⁾。

例えば、柳田国男が考える常民社会からの逸脱者としての異人を、赤坂は以下のように分類している。

(1)能動型 (性格・能力において村人よりも能動的積極的なもの)

(イ) 生理型 大力・大食・大酒・健脚など

(ロ) 智能型 嘘つき・能弁・頓智・勇敢・おどけ・世話好き・異常信仰・将棋名人など

(ハ) 芸能型 歌舞上手・芸達者・詩歌上手・鉄砲上手・能書・木登り上手など

(2)退嬰型 (性格・能力において村人よりも退嬰的・消極的なもの)

偏食者・臆病者・奇習者・独身者など

(『異人論序説』、126)

こうした常民社会からの逸脱者は民譚の主人公とも重なり、常民の平均値 (共同体の価値規範) からの逸脱は過剰という側面も持っている。

一方ヴァルデンフェルスも、異他性の特徴を逸脱や過剰として捉えている。前述したような脱自的異他性は、文字通り自己を越え出るようなものとなる。「根本的に異他なるものは、存立している意味の地平を乗り越えていくような余剰 *Überschuß*、過剰 *Exzeß* として把握される」(TF, 37)。つまり、自己の内でありながら、自己には収まりきらない逸脱や余剰として現れ、自己とは異なるものとして離れていくことによって、自己そのものが明確に示されるようなものとして、異他性が特徴づけられるということである。

2.5 正常性と異常性

こうした過剰や逸脱は、異常性の問題へとつながっていく。つまり、固有性と異他性との関係は正常性と異常性の関係に類比される。

赤坂は、前述したような逸脱性のために常民社会の注視をあびる者としての「異常

人物」が民俗的世界の内なる<異人>であると指摘しつつ、以下のように考察する。「尋常平凡の支配する常民社会においては、ほんのささやかな逸脱や偏奇も<異常性>として指弾的にされやすい。共同体の深部に埋め込まれたアイデンティティ維持装置が、ここでは「異常人物」というかたちで露呈している、といってもよい」(『異人論序説』、128)。

一方ヴァルデンフェルスにとっては、過剰や逸脱を特徴として持つ根本的異他性の登場によって秩序の限界が越えられる。「この秩序から逃れていく余剰的な異他なるものを、我々は外秩序的異他性 *extraordinäre Fremdheit*、文字通りの意味では法-外なもの *Außer-ordentliches* と呼ぶ」(VM, S.65)。秩序そのものは日常性や正常性といったものを構成しており、外秩序的異他性はそのような日常性や正常性を危うくするのである。「正常性はいつでも崩壊し、馴染みのないものの水門が開かれうる。しかし、このことは正常性がないということの意味してはいない。正常性が届く範囲では、異他性は日常的で制度的な秩序の領域内に属するものの相対的異他性に限定される」(BE, 242)。

このように、正常性と異常性に関わる異他性は、常に正常性が支配する常民社会を脅かす一方で、その常民社会の中では内なる異人として相対化された意味での異他性にとどまるのである。

3 異他性の現象学の独自性

このように、民俗学における異人論と異他性の現象学においていくつかの特徴で親縁性が見られる。しかし、それらの特徴においても詳細な部分ではニュアンスの違いが感じられる。また赤坂は、『異人論序説』において「現象学」的な側面がその後の課題だとしつつも、その後は「考古学」や民俗学的研究へと関心を深めていっている⁽⁷⁾。そのことにはどのような事情があるのであろうか。

民俗学の異人論において捉えきれていない異他性の特徴を明らかにするとともに、異他性の現象学の持つ独自性を明らかにしたい。

3.1 異他なるものの非人称性

まず考えられることとして、民俗学においては異他なるものは常に「異人」(ある

いはよそ者)として扱われており、社会学のように実体化された人間を扱ってはいないものの、ある程度の具体性を持つが故に、そして民俗学においては「さまざまな位相の一つに出現する、民俗社会にとっての『他者』つまり『異人』」(小松『異人論』、13)を扱うことが中心となるが故に、経験の中で本質的に働いている根本的な異他性を捉えきれていない。その1つとして、ヴァルデンフェルスは異他性の非人称性について論じている。

異他なるもの *das Fremde* という時、それは男性でも女性でもないもの(中性)として扱われているというだけではなく、そうした人称化される以前のもの(現象)として考えられている。その一方で、まさしくその異他なるものに気づくことによって人称化が始まるということであり、そのように人称化して捉えられた異他なるものは既に相対化されてしまった異人(よそ者)となる。

もちろん赤坂自身もこの異他なるものの非人称性について語っていない訳ではない。例えば、日本の妖怪を取り上げて次のように言う。「民俗社会の周縁部に出没する名付けられざるモノとしての事物や現象が、妖怪であり、『もの』や魔である、といいかえることができる」(『異人論序説』、256)。しかし、そうした妖怪や魔と遭遇するのが地上の異界であり、「妖怪たちはその異形の背に<異界>を負いつつ、私たちの日常世界を訪れる<異人>なのである」(前掲書、258)⁽⁸⁾。その意味では、民俗学において扱われるのは日常世界を訪れてくる<異人>であり、人称化される前にある根本的な異他性そのものは問題にしないように思われる。

3.2 異他なるものの要求

また、非人称的な異他なるものは要求という形で現れる。避けがたい仕方で襲ってくる異他なるものの要求、そこで生じるパトスに対して、我々は応答せざるをえない。このようにして、ヴァルデンフェルスは *Pathos* (パトス) と *Response* (応答) を対で考えている。「異他なるものは異他なるものとして、現象学の応答的形式 *responsive Form* を必要とする。この応答の形式は、意外な *befremdend* 仕方で、驚愕させるような *erschreckend* 仕方で、あるいは驚嘆させるような *erstaunlich* 仕方で、我々を挑発し *herausfordern*、誘い出し *herauslocken*、呼び出す *herausrufen* とともに、我々が問いつつ知ろうとしたり理解しようとしたりすることに乗り出す前に、我々固有の可能性に疑

いを差し挟むようなものに接して始まる」(GPF, 58)。

また、ヴァルデンフェルスはこうした異他なる要求 *fremde Ansprüche* は2つの意味で把握されると指摘する。1つは誰か(他の人)に向けられるようなアペール *Appell* であり、もう1つは何か(他の物)におよぶような主張 *Prätention* である(vgl. TF, 118, VM, 76, GPF, 59)。これに対し、「要求への応答は、目をやること *Hinsehen* や耳を傾けること *Hinhören* で始まる」(TF, 118-119)。そして、2つの要求の形式に対応して、2つの答えの形式がある。その1つはアペールに対し答えを与えたり拒否したりする応答 *das Antworten (response)* であり、もう1つはある主張の中で問われた内容に対して与えられる解答 *die Antwort (answer)* である(vgl. TF, 119, VM, 77, GPF, 60)。

そして、この解答そのものが固有のものであると言える。というのは、解答は私が異他なる要求に応答することによって生成したものであるからである。それに対し、「他者(他の物) *der/die/das Andere* は我々が解答として何かを与えつつそれに応答するような要求において形づけられる時にのみ、異他なるものの変種 *Spielart* として妥当する」(TF, 118)。つまり、他者(他の物)とは異他なる要求によって形づけられるものであり、それとは関係なしに存在できるようなものではないということである。

このように、異他なるものはその要求によって固有のものとして区別され、固有のものはその要求に対して解答を与えることによってその固有性を保持するようなものとして明らかとなる。一方民俗学における異人論では、異他なるものの要求が持つ性格については異人そのものが持っている特徴として示している⁹⁾が、その要求そのものや要求に対する応答というあり方までは捉えきれていない。その意味で、必ずしも経験の本質に位置づけられるようなものとしてまとめ上げられてはいないと言えるであろう。

4 結語

さて、本論では異他性の現象学と民俗学における異人論との類似点を示しつつ、そこで言われている異他性がどのようなものであるかを明らかにしてきたが、最後に異他性の現象学の展望を示しておきたい。

まずこの研究で今後考えられることとしては、民俗学で具体的に捉えられてきた異人論を、異他性の現象学の文脈から捉え直すことはできないかということである。異

人論は様々な位相で出現する異人に関する資料を豊富に提供してくれているが、それらは一面的に捉えられた雑多なものにすぎず、必ずしも経験の本質に位置づけられるようなものとしてまとめ上げられてはいない。そのようにばらばらな印象のある異人論を一つの文脈の中にまとめ上げることが異他性の現象学によって可能であり、赤坂も構想していたことなのではないであろうか。

一方、異他性の現象学が一つの学問として存立するためには、多くの経験的資料を必要としており、その資料を民俗学は提供してくれるように思われる。つまり、異他性の現象学は異人論による補完を必要としているということである。また、それは西洋的な異他性の現象学からはまさに「異他的」な日本の民俗学によって補完するということも意味している。

このようなことはこれまで行われてこなかったことであり、これから実際に相互的な研究がなされうるように思われるが、ここではその可能性を示したところで満足したいと思う。

注

- (1) 赤坂は、『異人論序説』の中で現象学的研究の成果について度々言及するとともに、第3章の標題として「<異人>の現象学」(239) という表現を使用している。
- (2) このような表現は、赤坂の『異人論序説』の中においても見られる。「人間はひとつの意味にみたされた内部を析出し、同時に、小屋の壁という境界線のむこうへ外部を疎外する」(13)。
- (3) 小松和彦も同様の指摘をしている(『異人論』、246 参照)。その際、「異他性」ではなく、「他者性」という表現が使われている。
- (4) 秩序との関係については以下の赤坂の叙述も参照。「社会集団にはそれぞれ、固有の私的なコード(=規範)が内在化されている。その私的コードを理解し共有する者だけが、秩序の構成員としての資格を獲得し、外集団に対して内集団(われわれ集団)を形成することができる。かれらはみずからの内集団への帰属を確認するために、すなわち社会的アイデンティティをいっそう堅固なものとするために、秩序の周縁部に、否定的アイデンティティを体現する他者を必要とする。

内集団の私的コードから洩れた、あるいは排斥された諸要素（属性）である否定的アイデンティティを具現している他者こそが、社会秩序にとっての〈異人〉である」（『異人論序説』、22）。

- (5) 小松和彦も山姥の分析を通して、自己や他者の認識の問題と関連づけ以下のように述べている。「『私』以外のすべてが、…（中略）…、『他者』であり『鬼』であるわけではなく、それは、『私』と『私』以外の人間との関係性のなかから生じるものであり、その関係の経験を通じて『ウチ』なるものとしての『我々』、もしくは『ソト』なるものとしての『他者』が現出するのである」（『異人論』、117）。
- (6) こうした異他性と逸脱との関係については、小松『異人論』、241も参照（前述したように、小松自身は「異他性」という表現を使わず、「他者性」と表現している）。
- (7) 『異人論序説』の初版「あとがき」（1985）には「現象学的な側面についてはほんのデッサン程度のもので、これからの課題である」（331）と書かれていたが、後の「文庫版あとがき」（1992）においては「わたしの関心の大きな流れは、予期に反して〈現象学〉へ向かうことなく、いよいよ〈考古学〉へと、その傾斜を加速度的に深めつつあることだけは確かなようだ」（335）と書かれている。
- (8) 一方、「異人」と「妖怪」の関係については、以下の小松和彦の叙述も参照。「『異人』とは、民俗社会の人びとにとっての社会関係上の『他者』である。これに対して、『妖怪』とは、人びとの想像力によって生み出された『他者』である。同じ『他者』であっても、一方は社会的存在であり、他方は想像的存在であるという相違を示しているのだが、両者は深い結びつきをもっている、というのは、『異人』が人びとの想像力を刺激し、それに幻想化という処理がほどこされると『妖怪』が生じるからである」（『異人論』、268）。
- (9) 異人の持つ両義的な性格については、赤坂『異人論序説』、85-115、小松『異人論』、13-16参照。

参考文献

ヴァルデンフェルスの著作については、以下のように略記する。

TF: *Topographie des Fremden. Studien zur Phänomenologie des Fremden*, Bd. I, Frankfurt am Main 1997.

VM: *Verfremdung der Moderne*, Göttingen 2001.

BE: *Bruchlinien der Erfahrung*, Frankfurt am Main 2002.

GPF: *Grundmotive einer Phänomenologie des Fremden*, Frankfurt am Main 2006.

赤坂憲雄『異人論序説』、ちくま学芸文庫、1992（初版は砂子屋書房、1985）

小松和彦『異人論』、ちくま学芸文庫、1995（初版は青土社、1985）